

# 全学統一オンライン試験の実施 - その展望と課題 -

内海 淳<sup>\*1</sup>

Email: utsumi@cc.hirosaki-u.ac.jp

\*1: 弘前大学人文学部

◎Key Words オンライン試験, TOEIC, LMS

## 1. はじめに

弘前大学では、これまで学内のサーバ上にLMSを用いて英語のオンライン試験システムを構築してきた。2012年度には、このシステムを使い、1年生全員を対象とした統一の英語オンライン試験を実施した。この試験の目的は、学生の能力の実態及び教育効果を確認することであり、そのためには学生のベストエフォートを引き出すことが必要である。しかし、実際の結果はあまり芳しいものではなかった。2012年度以前もこの試験を実施していたが、それらは試行的で任意の学生を対象にした試験であったため、ベストエフォート問題は顕在化していなかった。

本発表では、この試験の実施結果を踏まえ、このようなオンライン統一試験の持つ可能性や課題を再検討する。特に、限られたスタッフや機材、不正防止対策、成績評価への利用などの実施の際の制約の中で、学生のベストエフォートを引き出すにはどのような方法が望ましいかを考察する。

## 2. 取り組みの概要

### 2.1 TOEIC 模擬試験

弘前大学では、2005年度から、新入生全員を対象とした英語のオンライン試験として、TOEIC 模擬試験<sup>1</sup>を実施してきた。このTOEIC 模擬試験は、教材配信システムとしてLMSのWebClass<sup>2</sup>を採用し、試験問題のコンテンツとして、アルク社の作成したTOEIC 模擬試験問題を使用している。正式なTOEICでは200問の設問を2時間かけて解答するのに対し、この模擬試験では100問の設問を1時間かけて解答する。

このTOEIC 模擬試験導入の目的は、弘前大学に入学する学生の英語能力の到達度を調査するためである。例年、この入学直後のTOEIC 模擬試験の結果は、授業開始前の学生の英語能力の指標として利用されている。同時に、学生にTOEIC形式の試験に慣れてもらい、TOEIC 公開試験を積極的に

受験することも目的の一つである。

### 2.2 試行的な実施

2005年度から2011年度まではTOEIC 模擬試験の試行的な実施を行った。弘前大学の新入生は、前期の通常の授業が開始する前に、このTOEIC 模擬試験を受験することになっていたが、この期間のTOEIC 模擬試験の受験は義務ではないため、新入生全員が受験したわけではない。しかし、例年、90%前後の新入生が受験してきた。

この試行的な実施機関の間に、TOEIC 模擬試験の成績と、大学入試センター試験やTOEIC 公開試験の成績との相関関係を調査し、これらの間に十分な相関関係があることを確認した。

### 2.3 TOEIC 模擬試験の義務化

2012年度の新入生から、TOEIC 模擬試験の受験を義務化し、新入生は入学直後と1年次の終了時にTOEIC 模擬試験を受験することが必須となった。ただし、義務化といっても、受験しなかった場合の罰則などはない。

## 3. ベストエフォート問題

### 3.1 義務化の結果

2012年度のTOEIC 模擬試験の受験義務化の結果、入学時の受験率は入学者1405名の全員が受験し、100%となった。しかし、終了時の受験率は、欠席者が226名出て、受験率は84%と大幅に低下した。

さらに、入学時の平均点は、200点満点の78点であるのに対し、終了時は69点と大幅に低下している。終了時の試験を欠席した学生の入学時の成績の平均は80点である。比較的成績の良い学生が受験しなかったために終了時の平均点が低下したとも考えられるため、終了時の試験を受験した学生のみを比較すると、入学時は77点であるのに対し、終了時は69点となり、欠席者を含めた場合と大差がなかった。

<sup>1</sup> 詳細については、内海<sup>1)</sup>を参照。

<sup>2</sup> <http://www.webclass.jp/>

### 3.2 ベストエフォートの欠如

上述のことから、学生は入学時には真摯な姿勢で受験していたのに対し、終了時にはあまり真剣に取り組んでいなかったと考えられる。このことを明確に示す指標として、欠席者の数や成績だけでなく、解答に要した時間を挙げるることができる。図1に入学時と終了時の解答時間の比較を示す。

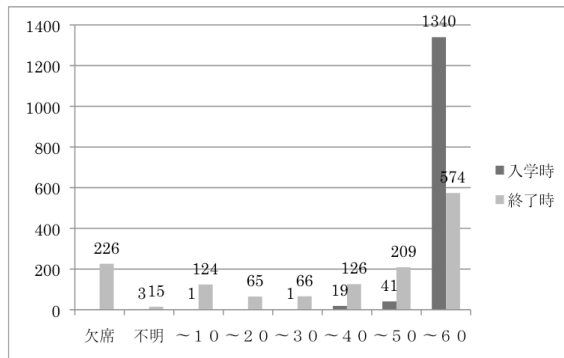


図1 解答時間の比較

TOEIC 模擬試験は解答に 60 分を必要とするように設計された試験である。図1から明らかなように、大半の学生の入学時の解答時間は 50 分を超えているのに対し、終了時に 50 分以上の時間をかけて解答している学生は半分にも満たない。解答に 50 分以上時間をかけている学生の成績のみを抽出すると、入学時の 79 点に対し、終了時は 78 点となり、大幅な低下は見られない。

TOEIC 模擬試験の受験を義務化するだけではダメなことは明らかである。例えば、学生の中には、解答開始のボタンを押した直後に解答終了ボタンを押し、試験時間が 2 秒という学生も複数いた。これによって、「受験した」という証拠とするのである。もちろん、解答時間がそのまま、学生の真摯な姿勢を反映しているわけではない。中には、ディスプレイの前にただ座っているだけという学生も存在している。

### 3.3 ベストエフォートを引き出すには

弘前大学の TOEIC 模擬試験の主な目的は、学生の英語能力を正確に測定して、その能力レベルに対して適切な英語カリキュラムを開発・提供する<sup>3</sup>ための土台を提供することである。そのためには、学生のこの試験に真摯に取り組む姿勢、ベストエフォートが不可欠である。そのためには、TOEIC 模擬試験の成績を、何らかの形で、学生の成績評価に結びつけることが必要となる。

最も確実な方法は、おそらく、この試験の成績をそのまま学生の成績判定に使用することである。

<sup>3</sup> TOEIC 模擬試験を使ったカリキュラム開発のための教授法評価については内海<sup>2)</sup>を参照。

う。この試験の成績が英語の科目の成績と直結していれば、学生はベストエフォートを出さざるをえない。

能力別のクラス編成を行なっていて、そのクラス分けのために試験を実施する場合は、学生が意図的にテストで低い成績を出して「より簡単で楽な」クラスに配属されるようにするケースも想定されるが、クラスごとの評価ではなく、統一試験による成績評価を行えば、このケースも防止できると考えられる。

しかし、この方法を実行に移すことは極めて難しい。弘前大学では、他の多くの大学と同様に、各教員が独自の基準で成績評価を行なっている。TOEIC 模擬試験のような統一試験で成績評価を行う場合には、各教員の同意が必要となるが、現状では、このような同意を得ることがきわめて困難であるからである。

次に、TOEIC 模擬試験で取るべき点数を指定して、その点数を超えない場合には、英語の科目の成績評価を行わないという方法が考えられる。この方法であれば、個々の科目の成績評価はその科目の担当教員が行うため、上述の方法よりも担当教員の同意を得られやすい。能力別クラス編成を行なっている場合は、そのクラスのレベルに合わせて、点数を設定することにより調整可能である。

### 4. 「できない」か「やらない」か

弘前大学における TOEIC 模擬試験のように、何らかの形で統一的なプレイメントテストやアチーブメントテストを実施している大学は多く存在し、また、オンライン試験の普及に従ってこれからも増えていくと予想される。このような統一試験を利用する大学は遅かれ早かれこの問題に直面する。その場合には、学生がその試験に対してベストエフォートを出しているかどうか、すなわち、「できない」のか「やらない」のかを判断して、適切な対処を行う必要がある。

### 5. おわりに

本発表ではオンラインの統一試験の実施の際に、受験者の真摯な努力、すなわち、ベストエフォートの有無を判断し、その問題に対処する方法について考察した。

#### 参考文献

- (1) 内海 淳：“コンピュータを用いた TOEIC 模擬試験の実施”，2006 PC Conference 論文集，pp.399-400 (2006)。
- (2) 内海 淳：“オンライン試験と教授法評価”，CIEC 研究会論文誌 vol.1, pp.65-74 (2010)。